

薬剤投与によって ALT のデータ変動を認めた症例についての当社での対応

演者：岡田健太

【はじめに】検査センターである当社は、採血から測定に入るまでに、院内で検査を行う場合よりも時間を要する。よって、採血後に薬剤によりデータが経時的変動を示す場合、すでにプラトーに達している場合が多く、このような薬剤の影響に遭遇する可能性は低い。今回 ALT が初検と再検で乖離を認めたことにより発見できた症例についてその結果と当社での対応を報告する。

【測定機器および試薬】測定機器：BM-8040GX 自動分析装置（日本電子株式会社）試薬：L タイプワコーALT・J 2（富士フイルム和光純薬株式会社）

【症例】ALT が前回値 192 U/L、今回値 79 U/L となり、当社システムの前回値チェックにて再検査対象となった。再検査にて測定値は 85 U/L となったが、初検値と再検値に乖離があるというエラーフラグがつき、再再検を実施するとさらに上昇し、94 U/L となった。医院に連絡し、使用している薬剤の確認を行ったが、不明。ALT の値がどの時点でプラトーに達するか不明であったため、継続して測定を行い、初回測定から 2 時間後 125 U/L となる。この時点で

医院より、結果が欲しいということであったため、まだ上昇する可能性があることを伝えた上で、ALT 値は 125 U/L で報告。ちなみに AST 値に変動はみられなかった。この患者は、継続的に提出があったため、3 日前の検体も再測定を行ったところ 3 日前は 192 U/L で報告していたが再測定により 435 U/L と上昇したため、この結果についても医院に報告をおこなった。

初回報告から 2 日後、ドパコールを他の人より多めに飲んでいるという情報提供があり、本症例は以前より報告されているレボドパ製剤投与中の患者における ALT 値の経時の上昇によるものと確定した。

【まとめ】偶然薬剤の影響に気付くことができたが、検査センターであるが故、患者背景や投与薬剤の確認にいたるまでに時間がかかった症例であった。検査値に影響する薬剤は存在するが、先生方がその情報をすべて理解されていない場合も考えられる。情報発信という形で注意を促していきたい。連絡先：079-267-1251